GSID

Discussion Paper No.204

中国の「抜河」に関する史料と考察

櫻井 龍彦

March 2017

Graduate School
of
International Development

NAGOYA UNIVERSITY
NAGOYA　464-8601, JAPAN

〒464-8601　名古屋市千種区不老町
名古屋大学大学院国際開発研究科

中国の「抜河」に関する史料と考察

櫻井龍彦

はじめに

中国の抜河すなわち綱引きについては、『古今図書集成』博物彙編芸術典技戯部、巻 805 で主な史料を見ることができる。ただし唐代以前のものに限られている。

またいくつかの先行研究、たとえば、

松本盛長「支那の抜河に就いて」『南方土俗』3-1、南方土俗発行所、1934 年
羅香林「唐代抜河之戯考」『唐代文化史』台湾商務印書館、1955 年
石田幹之助「唐史漫抄」『増訂長安の春』平凡社：東洋文庫、1973 年
鈴木圓蔵「唐代の抜河についての一試考」『神奈川県立外語短期大学紀要』人文・社会篇 7 、1978 年

などの論考にも抜河に関する古典史料があげられているが、いずれも参考にしたのが『古今図書集成』であるのか、論文名に示されるように唐代以前の史料であり、どれも同じである。

近年では中村裕一『中国古代の年中行事』第 1 冊春（汲古書院、2009 年）の正月「十五日の抜河と相撲」と三月「清明の競技」において、主な抜河史料が集成されている。中村のこの年中行事全冊は非常に多くの文献から歳時風俗や行事を集めた労作であるが、隋唐時代までの文献が採録の主体である。したがって抜河史料も上記の先行研究に若干宋代以降のものが補足されているが、基本的には従来の史料を超えるものではない。中国の研究者による論考が引用するものも、ほとんどが孫引きでおわっている。

中国における抜河史料が唐代以前にほぼ限られているのは、宋以降の時代になると、この風俗が衰退したので文献に記録がないのだろうか。礼教観念が社会に深化し、抜河は士大夫や普通の大人がおこなうような品格のあるものではなく、子どもの遊びとして見られるようになったことも原因かもしれない。現実に史料 15, 16 のように、抜河は明代では「小児」、「市井児童之楽」であって「雅ならず」と見られていた。

日本でも絵図などをみると子どもの遊びであったようだ。室町時代、16 世紀と考えられる上杉本の『洛中洛外図』や名古屋城の襖絵には、屋外で子どもが綱引きに興じている絵がある。

図１　上杉本『洛中洛外図』　　子どもの綱引き

図２　名古屋城本丸御殿対面所襖絵の風俗図　　子どもの綱引き

宋代以降に抜河が全く消えてしまったわけではない。本稿でも宋以降の文献を若干収録しておいたが、網羅的に精査したわけではない。今後は、とくに明清民国時代に多数刊行された地方志を丹念に見ていく必要があるだろう。

本稿に収録する史料は宋以降のものも含めて、これまで知られた史料の補填となるほどのものではないが、新史料として特筆すべきものを一つあげてある（史料 10）。近年、中国の研究者が発見した、唐代、渡来学僧による『梵網経』注釈で、おそらく日本ではまだ知られていない史料である（張固也　2010）。唐代における宮廷内外の抜河の風俗をよく伝えるものであり、従来不明であった抜河という名称の由来や規模、様態、地域差などを知る上で貴重な史料である。

本稿の趣旨は、従来の史料をまずは時代順に並べ直し、綱の名称、起源、目的、地域、時期、形状、材料、規模、担い手など特定の視点をもうけて整理し、それぞれの史料から引き出せる情報を提示して、現代に伝承される抜河の歴史と行事内容への理解を深めるという点にある。その際に日本をはじめ韓国、ベトナムなどに類似例を求め、東アジアの広域のな

かで中国の事例を位置づけてみたい。

（１）抜河史料

１，『墨子』巻 13 魯問第 49　　四部叢刊初編本　　戦国時代

昔者楚人与越人舟戦于江，楚人順流而進，迎流而退，見利而進，見不利則其退難。越人迎流而進，順流而退，見利而進，見不利則其退速。越人因此若勢，亟敗楚人。
公輸子曰自魯南遊楚，焉始為舟戦之器，作為鉤強之備，退者鉤之，進者強之，量其鉤強之長，而制為之兵。楚之兵節，越之兵不節，楚人因此若勢，亟敗越人。
公輸子善其巧，以語子墨子曰，我舟戦鉤強，不知子之義亦有鉤強乎。子墨子曰，我義之鉤強，賢於子舟戦之鉤強。我鉤強，我鉤之以愛，揣之以恭。弗鉤以愛則不親，弗揣以恭則速狎，狎而不親則速離。故交相愛，交相恭，猶若相利也。今子鉤而止人，人亦鉤而止子，子強而距人，人亦強而距子，交相鉤，交相強，猶若相害也。故我義之鉤強，賢子舟戦之鉤強。

２，宗懐『荊楚歳時記』　　宝顔堂秘笈本　梁代(502-508)
宗懐（498-502 生～561-565 没）

（立春）為施鉤之戯，以綆作篾纜，相罥綿亘数里，鳴鼓牽之。
按施鉤之戯,求諸外典，未有前事。公輸〔子〕遊楚，為舟之戯。退則鉤之，進則強之。名鉤強。遂以鉤為戯。意起于此。涅槃経曰,闘輪罥索。其外国之戯乎,今鞦韆亦施鉤之類也。

３，『隋書』巻 31 地理志下　　中華書局本　1973 年　7 世紀初め
（南郡、襄陽）二郡又有牽鉤之戦，云従講武所出，楚将伐呉，以為教戦，流遷不改，習以相伝。鉤初発動，皆有鼓節，群譟歌謡，振驚遠近。俗云以此厭勝，用致豊穣。其事亦伝于他郡。梁簡帝之臨雍部，発教禁之，由是頗息。

４，隋朝の画家展子虔が描いた古寺の壁画に、八鬼が抜河をする絵画があった。
・梅堯臣「和江隣幾学士画鬼抜河篇」『宛陵先生集』巻 58　　四部叢刊本
梅堯臣　北宋　1002～1060

蒲中古寺壁画古、画者隋代展子虔、分明八鬼抜河戯、
中建二旗観却前、東廂四鬼苦用力、索尾槐断一鬼顛、
西廂四鬼来背挽、双手碓下抵以肩、龍頭魚身霹靂使、
持鉞植立旗左偏、抜山夜叉右握斧、各司勝負如争先、

両旁撾鼓鼓四面、声勢助勇努眼圓、臂臬張挙撃捧首、
似與暴謔意態全、当正大鬼按膝坐、三鬼帯韝一執旃、
操刀擐囊力指督、怒髪上直筋舊纏、虎尾人身又踣顧
蒺〇短挺金鎚堅、高下尊卑二十四、二十四鬼無黄泉、　〇字は草冠＋梨
角錐競強欲何睹、曷不各各還荒挺。

蒲中古寺とは蒲州、いまの山西省運城市永済市あたり。隋代にはすでに北方の黄河流域にまで抜河が伝播していたことがわかる。

・蘇頌「和諸君観画鬼抜河」『蘇魏公文集』巻３　　欽定四庫全書本
　蘇頌　北宋　1020～1101

関中古有抜河戯、伝聞始盛隋唐世。長絙百尺人両朋、
逓以勇力相牽制。芳華楽府務誇大、黎園公卿謾軽肆。
抜山扛鼎烏足矜、引繩排根非勝事。当時好尚人競習、
鬼物何為亦能是。展呉画格入神品、陸法尤長写霊異。　展呉は展子虔と玄宗期の画家呉道玄
蒲津古寺筆跡奇、世疑二子之你〇置。旗門双立衆鬼環、〇字は糸＋尼
大石当中坐渠帥。蓬頭圜目牙奮踴、植鼓揚桴各凌厲。
東西挽引力若停、賦彩自分傾奪勢。画来已歴数百年、
墻壁巋然今不廃。観風使者集賢翁、毎遊其下幾忘味。
因令搨手裂斉紈、横巻伝看得形似。精神気韻信瓌詭、
毫髪軽濃皆髣髴。持来都下示朋僚、一見飄然動詩思。
諸公詩豪固難敵、形容物象尤精緻。気完語健雋衆口、
二子声名転増貴。予観昔之善画者、心手規橅無不至。
窮奇極怪千万端、特出一時之用意。鬼神冥漠不可詰、
豈有便能人勇智。仙官仏像亦如斯、変態随時転奇麗。
遂令来者信有説、塔廟従而増侈費。後賢雖欲究端倪、
竟亦無由革頽弊。因知怪誕一崇長、漸靡成風滋巧偽。
茲図他日遂流伝、更使人心惑魑魅。

５，唐・中宗
・景龍３年（709）二月巳丑
『旧唐書』中宗本紀　　中華書局本　1975 年
幸玄武門，与近臣観宮女大酺，既而左右分曹，共争勝負，上又遣宮女為市肆，鬻売衆物，令宰臣及公卿為商賈，与之交易，因為忿争，言辞猥褻。上与后観之，以為笑楽。
『新唐書』中宗本紀　　中華書局本　1975 年

（中宗）及皇后幸玄武門，観宮女拔河，為宮市以嬉。

『旧唐書』では「拔河」ではなく、「大酺」という。おそらく両者は連続するもので、酒食が下賜され宴会のあと拔河がおこなわれたのであろう。

『資治通鑑』巻 209　　中華書局本　1956 年

上幸玄武門，与近臣観宮女拔河（胡三省の注に「以麻絙巨竹，分朋而挽水。謂之拔河，以定勝負。」），又命宮女為市肆，公卿為商旅，与之交易，因為忿争，言辞褻慢。上与后臨観之楽。

・景龍４年（710）二月庚戌

『旧唐書』中宗本紀

令中書門下供奉官五品已上、文武三品已上并諸学士等，自芳林門入集於梨園毬場，分朋拔河，帝與皇后、公主親往観之。

『新唐書』中宗本紀

（中宗）及后、妃、公主観三品以上拔河。

『資治通鑑』巻 209

上御梨園毬場,命文武三品以上抛毬及分朋拔河。韋巨源、唐休璟衰老，随絙踣地，久之不能興。上及皇后、妃、主臨観，大笑。

６，武平一『景龍文館記』　　説郛（宛委山堂本）本　巻 46

敏輯校『景龍文館記　集賢注記』中国文学研究典籍叢刊　　中華書局　2015 年

武平一は生卒年不明だが７世紀から８世紀にかけての人物。武則天の一族であった。

三月一日清明，（中宗）幸梨園，命侍臣為拔河之戯。（景龍）四年清明，中宗幸梨園，命侍臣為拔河之戯。以大麻絙，両頭繫十余小索，毎索数人執之以挽，争絙，以力弱者為輸。時七宰相、二駙馬為東朋，三相、五將為西朋。僕射韋巨源、少师唐休璟以年老，隨絙而踣，久不能起。帝以為笑楽。

７，唐、封演『封氏聞見記』巻６　　欽定四庫全書本

封演の生卒年は不明。8 世紀後半の人。成書は貞元 16 年（800）ごろとみられる。

拔河，古謂之牽釣，襄漢風俗，常以正月一作/旦望日為之。相傳楚將伐吳，以為教戰。梁簡文臨雍部，禁之而不能絶。古用篾纜，今民則以大麻絙，長四五十丈，兩頭分繫小索數百條，挂于前。分二朋，兩相齊挽。當大絙之中，立大旗為界。震鼓叫噪，使相牽引。以郤者為勝，就者為輸，名曰拔河。

中宗時，曾以清明日，御梨一作/黎園毬場，召侍臣為拔河之戯。時宰相、二駙馬為東朋，

三宰相、五將軍為西朋。東朋貴人多，西朋奏勝不平。請重定，不為改。西朋竟輸。僕射韋巨源、少師唐休璟年老，隨絙而踣，久不能興。上大笑，左右扶起。

王讜『唐語林』巻５　補遺にもほぼ同文がある。

８，唐・玄宗

・封演『封氏聞見記』巻６　　欽定四庫全書本

玄宗數御樓，設此戲，挽者至千餘人，喧呼動地。蕃客士庶觀者，莫不震駭。進士河東薛勝為「抜河賦」，其辭甚美，時人競傳之。

・玄宗『観抜河俗戯』詩序　『全唐詩』巻３　　中華書局本　1960 年

俗伝此戯, 必致豊年。故命北軍, 以求歳稔。

壮徒恒賈勇、抜拒抵長河。

欲練英雄志、須明勝負多。

譟齋山岌嶪、気作水騰波。

預期年歳稔、先此楽時和。

９，薛勝「抜河賦」　　『文苑英華』巻 81　　中華書局本　1966 年

皇帝大誇夸胡人， 以八方平泰， 百戯繁会。令壮士千人， 分為二隊, 名抜河於内, 実耀武於外、伊有司兮， 昼爾於麻， 宵爾於紉。成巨索兮高輪困, 大合拱兮長千尺。爾其東西之首也， 派別脉分， 以挂人胸腋。各引而向， 以牽乎強敵。載立長旌， 居中作程。苟過差於所誌， 知勝負之攸平。

於是勇士畢登， 囂声振騰。大魁離立， 麾之以肱。初拗怒而強項， 卒畏威而伏膺。皆陳力而就列， 同抜茅之相仍。瞋目贔屭， 壮心憑陵。執金吾祖紫衣以親鼓, 仗柱史持白簡以監縄。敗無隠悪， 彊無蔽能。咸若呑敵於胸中， 慘莫薑芥， 又似抜山於時後， 匪労凌兢。然后一鼓作気， 再鼓作力， 三鼓兮其縄則直。小不東兮大不東, 允執厥中。鼉鼓逢逢， 士力未窮。身挺抜而不動， 衣簾襜以従風。鬬甚城危， 急逾国蹙。履陥地而滅趾， 汗流珠而可掬。陰血作而顔若渥丹， 脹脉憤而体如瘿木。可以揮落日而横天闔， 触不周而動地軸， 孰云遇敵遷延、相持蓄縮而已。左兮莫往， 右兮莫来。秦皇鞭石而東向， 屹不可推。巨霊蹋山而西峙， 嶷乎難摧。縄〇（てへん＋暴）仆而将断， 猶匍匐而不迴。大夫以上， 停眙而忘食。将軍已下， 虓闞而成雷。千人抃， 万人哈， 呀奔走， 岔塵埃。超抜山兮力不竭， 信大国之壮観哉。

嗟夫。虚声奚為， 決勝在場。実勇奚為， 交争乃傷。彼壮士之始至， 信其鋒之莫当。泊標紛以校力， 突縄度而就彊。懦絶倒而臆仰， 壮乗勢而頭搶。紛縦横以抜靡， 齊抜刺而陸梁。天子啓玉歯以璀璨， 散金銭而莹煌。勝者皆曰， 予王之爪牙， 承王之寵光。将曰， 抜百城以賈勇， 豈乃牽一隊而為剛。

於是匈奴失筋，再拜称觴曰，君雄若此，臣国其亡。

10，張説「奉和聖製観拔河俗戯應制」　『全唐詩』巻 87　　中華書局本　1960 年

張説：乾封 2 年（667）～開元 18 年（730）　中宗、玄宗に仕える。

この詩は玄宗『観拔河俗戯』詩（史料８）に対する張説の應制詩である。

今歳好拖鈎、横街敞御楼。
長縄繫日住、貫索挽河流。
闘力頻催鼓、争都更上籌。
春来百種戯、天意在宜秋。

11，凝然『梵網戒本疏日珠鈔』巻 43

『大正新脩大蔵経』第 62 巻　続律疏部　大正一切経刊行会 1932 年

法進は鑑真に従って奈良時代、天平勝宝 6 年（754）、唐から渡来した僧である。生卒は景龍 3 年（709）～宝亀 9 年（778）。申州（いまの河南省信陽）羅山県の出身。『梵網経注』（現存しない）や『沙弥十戒並威儀経疏』五巻（現存）を著している。

凝然は仁治元年（1240）～元亨元年（1321）の生卒で、鎌倉時代後期の東大寺の学僧。『梵網戒本疏日珠鈔』を著したときには、法進の『梵網経注』はまだ存在したのであろう。本文に「進云」とあるのはその引用であるとおもわれる。下に引くのは、第三十三軽戒の「牽道」の部分の注である。法進は景龍 3 年の生まれであるから中宗、玄宗の時代の拔河の様子を伝えるものとして貴重な史料である。

（法）進云，牽道者，大唐已南禮［澧］朗州人，多樂作之。盡地作河，兩邊各有百人，或二百三百五百。相對以一條大繩，繩上復有子繩。繩頭著一木板，方三寸，長二尺五寸。兩頭繫繩。各樓［摟］人胸前，向前牽挽〔挽〕使過河，得度者爲勝。以賭當財物，買飲食共喫此物。亦出西南道。蓋州亦有處。竪一大木，頭繫兩繩，二邊各有百人，爭牽取倒。賭三千五千錢。弱輸他強州。大唐兩京，於時節日，墉人家多有婦女，共出坊曲路上，各三五百人，黒黒相抱腰。中央盡地作河，兩邊人數平等，遞相抱腰。最在前人手抱一物。競牽一時用力，向後挽〔挽〕得過河者，得一覩物。

12，『新唐書』巻５兵志　　中華書局本　1975 年

（玄宗）自天宝以後，…六軍宿衛，皆市人，富者販繒綵，食粱肉，壮者為角觝、拔河、翹木、扛鉄之戯。及禄山反，皆不能受甲矣。

唐代は帝王朝臣だけが拔河をしたのではなく、民間でもこの戯を楽しんだ。

13,『唐会要』巻 72　軍雑録　　北宋　王溥（922 年～982 年）

（玄宗）天宝末，…六軍宿衛之士，皆市人白徒，富者販繒綵，食粱肉，壮者為角觝、抜河、翹木、扛鉄。

14，晏殊『類要』

宋初の晏殊（991～1055）による類書。

・南宋、王象之『輿地紀勝』巻 74　帰州「風俗形勝」　　文海出版社　p 446

抜河之戯，晏公『類要』云，以麻絙巨竹，分朋而抜，謂之抜河。以定勝負、而祈農桑。

王象之は南宋の人。帰州いまの湖北省宜昌市秭帰県。

・南宋、祝穆『方輿勝覧』巻 58　帰州「風俗」　　文海出版社　1981 年　p 1192

抜河之戯，同上。以麻絙巨竹，分朋而抜水，謂之抜河。以定勝負、而祈農桑。

祝穆は南宋の人。（中村　2009：225）「同上」は晏公『類要』を言う。

『輿地紀勝』と違うのは、「分朋而抜水」と「水」字があること。

・南宋、胡三省『資治通鑑』巻 209「上幸玄武門，与近臣観宮女抜河」への注（史料４）

中華書局本　1956 年

以麻絙巨竹，分朋而挽水。謂之抜河，以定勝負。

胡三省は南宋末期の人。晏殊『類要』をみて注をつけたのだろう。

15，明、楊愼『楊升庵叢書』第 2 冊「画品」　王文才、萬光治等編注　天地出版社　2002 年

祓河　帰州之俗，以麻繫巨竹，分朋而挽，謂之祓河。『画譜』有「展子虔鬼祓河図」。

楊慎：1488 年～1559 年。宋代の地理書（13，14）に帰州の俗であった抜河は、明代になっても行われていた。史料 14 晏殊『類要』に同じ。

16，明、徐炬『古今事物原始』　　續修四庫全書本

今小児両頭拽索而対挽之，力強者索，弱者而仆，則以為勝負，此唐時清明節抜河之戯也。当時君臣亦以此為楽。出金波遺事。

17，明、謝肇淛『五雑組』巻２　天部二　　中華書局本　　1959 年

唐時，清明有抜河之戯。…夫此戯乃市井児童之楽，壮夫為之，已自不雅。而況以将相貴戚之臣，使之角力仆地，毀冠裂裳，不亦甚乎。

謝肇淛　隆慶元年（1567）～大啓四年（1624）

これは謝肇淛がおそらく封演『封氏聞見記』の文をもとに批判したものである。唐代、清明節におこなわれた抜河の戯が明代でも伝承されていた。ただ明代では抜河は子どもの遊びであり、大人がするものではない、という認識があった。

18，清、『洮州廳志』（光緒 33 年抄本）巻２　風俗
中国方志叢書、華北地方、第 349 号、成文出版社

正月初五、六日　（注）旧城民有拔河之戯。用長縄一条，繋小縄数十，千百人挽两頭，分朋牽扯之。
毎年正月元旦及歳時各節皆無異俗。惟正月初五日午後有擠縄之戯。其俗在西門外河灘，以大麻縄挽。作二段，長数十丈。另将小縄連挂大縄之末。分上下二朋，両挽少壮咸牽縄首，极力擠之，老弱旁観，鼓噪声可撼岳，為西城門為界，上下斎擠。凡家居上者上擠，家居下者則下擠，勝者踴躍歓呼，負者亦以為失意。其説以為擠勢之勝負，即以占年歳之豊歉焉。相沿已久不知所自。按襄漢拔河之挙，上古牽鈎之俗，殆其遺意歟。

洮州はいまの甘粛省臨潭県である。ここでは現在も元宵節に「万人拔河」という大規模な行事をおこなう。遡って清代の様子がこの『洮州廳志』でうかがえる。

写真１　甘粛省臨潭県　「万人拔河」

（２）考察

●拔河の古称

鈎強［拒］：『墨子』　戦国時代（史料１）

孫詒譲は『墨子間詁』で、この部分の注に、畢沅が『太平御覧』に鈎拒とあり、「退則鈎之，進則拒之也」というのを引用し、自らも「退者以物鈎之，則不得退，進者以物拒之，則不得進。此作鈎強無義，凡強字並当従御覧作拒。」と主張する。

施鈎：『荊楚歳時記』　南北朝時代（史料２）
牽鈎：『隋書』　隋代（史料３）、『封氏聞見記』　唐代（史料７）
拖鈎：　張説「奉和聖製観拔河俗戯應制」　唐代（史料 10）

牽道：『梵網戒本疏日珠鈔』　唐代（史料 11）

綱引きは現代中国語では抜河というが、それは唐代になってはじめて登場する言い方である。唐代には張説「奉和聖製観抜河俗戯應制」に拖鈎、『梵網戒本疏日珠鈔』に牽道という言い方もあったようである。それまでは戦国時代には鈎強[拒]、南北朝時代には施鈎、隋代には牽鈎などと呼ばれていた。

綱引きをなぜ抜河というかは不明とされてきた。張説「奉和聖製観抜河俗戯應制」には「長縄繫日住、貫索挽河流」とあるが、よくわからない。しかし『梵網戒本疏日珠鈔』に、「盡地作河，兩邊各有百人，或二百三百五百。相對以一條大繩，繩上復有子繩。繩頭著一木板方三寸長二尺五寸。兩頭繫繩。各樓［摟が正しいか］人胸前，向前牽桍〔挽が正しいか〕使過河。」とある。綱の中心点（のちに述べるようにそこには境界の標識として旗を立てた）の左右に帯状のバッファゾーンを設け、それを「河」と呼んだと考えられ、抜河はそれに由来する命名ではないかと思われる。想像するに河は二本線で地面に引かれ、競技者はそれぞれ線（河岸）の外側にいて綱を引き合い、河を越して相手側の線まで引き込まれたら負けという形式だったかもしれない。

●起源と沿革

抜河の起源については、『荊楚歳時記』（史料２）の「施鈎之戯」に隋の杜公瞻が「施鈎之戯，求諸外典，未有前事。」と言うように、それを知ることは困難であり、その事情はいまでも変わらない。

起源について記されている文献でよく引証されるのは、『墨子』（史料１）である。『封氏聞見記』（史料７）に「抜河…相伝楚将伐呉，以為教戦。」、『隋書』（史料３）に「牽鈎之戦，云従講武所出，楚将伐呉，以為教戦，流遷不改，習以相伝。」というように楚呉の戦闘時に用いた武具に始まると考えられている。

『墨子』（史料１）によれば、今から二千数百年以上前の春秋時代の楚国に始まり、その発明が春秋時代魯国の伝説的な工匠魯班（公輸子）と結びついている。

楚と越が水上舟戦をしたとき、楚はちょうど楚に来ていた公輸子（魯班）に“鈎強[拒]”という「舟戦之器」を設計してもらい水上作戦にもちいた。『隋書』（史料３）や『封氏聞見記』（史料７）では越ではなく楚が呉を伐ったとき用いたという。『隋書』に「講武より出づる所」、『封氏聞見記』に「以て教戦と為す」というように軍事用の戦具であり、当時の兵家と関係していたと思われる。しかし今日普通に見られる綱引きの形状や使い方からはほど遠いイメージである。

この時代の水上戦をイメージできる図として河南省汲県山彪鎮 1 号墓から出土した東周時代の鑑（容器の一種）や成都出土の水陸攻戦図がある（四川省博物館　1976、郭宝鈞　1959 年）

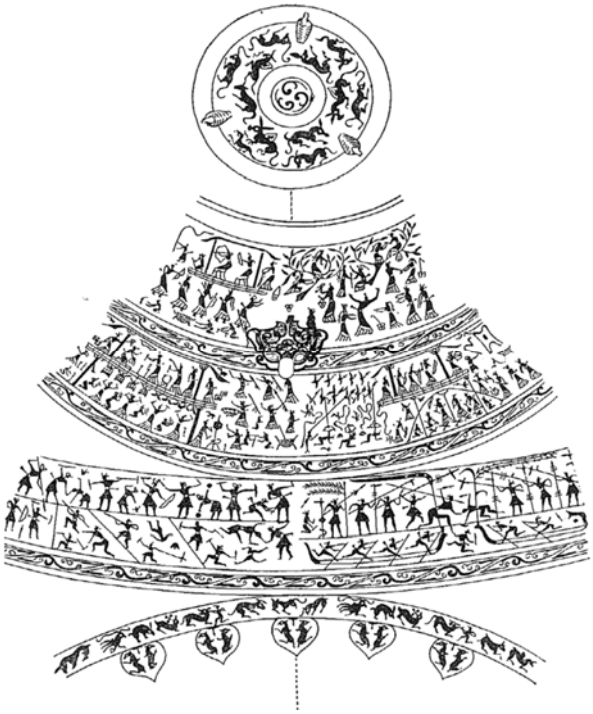

図３　水陸攻戦紋様展開図

綱引きの由来が軍事と関係しているのは、日本でもある。たとえば鹿児島県薩摩川内市で毎年９月におこなわれる大綱引きは、関が原の合戦の際、第 17 代島津義弘が兵士の士気を高めるために始めたとか、豊臣秀吉の命令で島津が朝鮮出兵のとき、兵士の戦意を鼓舞するために始めたという説などである。

中国では時代は清朝まで下るが、15 歳以上のダフール族（達斡爾族）青年男子が参加した軍事訓練のなかに「比頸力」がある。この頸（くび）綱引きは、もともと軍隊において肉体を鍛える軍事訓練として行われていたものが、民間に広まったものという（盛琦、丁志明 1992：110, 111）。

写真２　ダフール族の頸力比賽

なお日本でも古くから「首引き」があった。『鳥獣人物戯画』丙巻に首引き、耳引きをしている図がある。戯画の成立年代は平安末期から鎌倉時代と考えられているので、その時代に存在したことがわかる。

図４は喜多川歌麿が座敷あそびで首引きに興ずる美女を描いたもので、寛政４，５年ごろ（1792，93）の作といわれる。

図４　喜多川歌麿　寛政二美人の首引き

揚子江や漢水の流域では、『荊楚歳時記』に記事があるように、南北朝時代の荊楚地域で綱引きが行われていた。梁の太宗簡文帝（549-551 年在位）が雍州刺史のとき禁止令を出したほどなので、盛んだったと思われるが、禁止の理由はわからない。抜河は個人競技ではなく群衆による集団的な勝負事なので暴力沙汰が絶えなかったかもしれない。しかも唐代『梵網戒本疏日珠鈔』（史料 11)）に「以賭當財物」とあるように、賭博性もあった。為政者は社会秩序が乱れると判断したのかもしれない。ただし禁止令による効果については、『隋書』では「是れ由り頗る止む」とある一方、『封氏聞見記』では「之れを禁ずるも絶えること能わず」とあって、相反した結果となっている。抜河の当時の盛行を考えると、実情は「之れを禁ずるも絶えること能わず」であったのではないか。

その後、隋代から唐代までの間に、この風俗は北上し、いまの山西省や陝西省にでは行われていたことが、史料４、５でわかる。唐代ではとりわけ中宗、玄宗のとき盛大を極めた様子が『旧唐書』、『新唐書』（史料５）、『景龍文館記』（史料６）、『封氏聞見記』（史料７）、玄宗「観抜河俗戯」詩序（史料８）、薛勝「抜河賦」（史料９）、張説「奉和聖製観抜河俗戯應制」（史料10）『梵網戒本疏日珠鈔』（史料11）などからわかる。宮廷の朝臣のあいだで娯楽、遊戯として楽しまれたようであるが、宮廷行事にとどまらず、『新唐書』兵志（史料12）をみると、士兵や民間でも楽しまれたようである。

抜河は水上舟戦の武具という点から水上の綱引きがあったかといえば、中国でその事例

はみつからない。図３の水陸攻戦図にも兵士が長い戈・矛・戟などの武器で交戦する紋様はあるが、鈎強[拒]らしきものはない。

日本には水上でおこなう綱引きがある。福井県美浜町の日向湖と若狭湾をつなぐ運河で、小正月に「水中綱引き」や佐賀県唐津市鎮西町波戸漁港では８月 15 日お盆のとき「海中盆綱引き」である。

写真３　福井県美浜町「水中綱引き」　2009 年１月 18 日

写真４　佐賀県唐津市鎮西町「海中盆綱引き」　　2009 年

●目的

１，軍事的な目的

水上における戦船で用いる戦器が発明の動機であったことは起源のところで述べた。

次の２で述べるように、抜河はいまの日本や韓国と同じく農作物の豊穣を祈願、予祝する意義があった。しかし一方で、抜河が力比べであり体力増強に役立つものであるため、兵士の軍事訓練的な意味がまったくなくなったわけではないようだ。『新唐書』兵志（史料

12）に「六軍宿衛,…壮者為角觝、抜河、翹木、扛鉄之戯。」とあり、『唐会要』軍雑録（史料 13）にも「六軍宿衛之士,皆市人白徒,富者販繒綵，食粱肉，壮者為角觝、抜河、翹木、扛鉄」とほぼ同文があるように、兵志や軍雑録に抜河が記録されているからである。また玄宗「観抜河俗戯」詩（史料８）に「欲練英雄志」とあり、序に「北軍に命じ、以て歳稔を求めしむ」というのは、軍人を鍛えると同時に豊作を祈願している。

玄宗が屈強な兵士による抜河を諸外国の使節みせ、唐の軍事力の強勢を誇示しようとしたこともうかがえる。薛勝「抜河賦」（史料９）に「皇帝大誇夸胡人…於是匈奴失筋，再拜称觴曰,君雄若此，臣国其亡。」、『封氏聞見記』（史料７）に「蕃客士庶観者，莫不震駭。」とある。

２，厭勝のまじない、農作物の豊穣祈願

『隋書』（史料３）に「俗云以此厭勝，用致豊穣」、玄宗「観抜河俗戯」詩の序に（史料８）「俗伝此戯必致豊年。故命北軍,以求歳稔。」、その詩に「預期年歳稔」、張説「奉和聖製観抜河俗戯應」詩（史料 10）に「春来百種戯、天意在宜秋」とある。

はじめ、水上の合戦で使われた武具が、やがて陸上において除災、鎮悪、祈願、予祝、年占などの目的で行われるようになったのであろうか。双方が引き合って勝敗を争うという性格が豊穣の吉凶を占うことにつながる。

史料 14『類書』にも、「抜河之戯，…以定勝負、而祈農桑。」とあり、宋代でも五穀豊穣祈願をした。清代洮州の抜河も『洮州廳志』に「其説以為擠勢之勝負,即以占年歳之豊歉焉。」とある。

なお豊穣祈願の目的について、エバーハルトはこの『封氏聞見記』の記事から「湖北では、この日に大々的な綱引きをするのが習わしで、その際、綱は龍を、引くことは天に昇る動作を象徴する。同時に、これは一種の豊饒儀礼でもあった。」という（エバーハルト 1987:216）。

しかし『封氏聞見記』には「綱は龍を、引くことは天に昇る動作を象徴する。」という意味のことは書かれていない。綱が龍を象徴し、水神であることから雨乞いにも関係し、農作物の豊穣をもたらす、と考えることは可能であるが、文献上でそれを確認することはできない。

また揚子江流域は稲作地帯であり、豊穣の祈りは稲が中心と思われるが、文献で見る限り、そう主張できる論拠はない。特に綱の材料に稲わらが一切出てこないからである。一般に東アジア、東南アジアの綱引きが稲作モンスーン地帯の一つの文化要素として指摘でき、中国でも江南の稲作地帯に抜河が分布しているにもかかわらず、文献に稲に関する用語が出てこないのは不思議である。

３，娯楽遊戯

唐代の諸史料（５～13）に明らかである。

明の徐炬『古今事物原始』（史料 16）にも「今小児両頭拽索而対挽之、力強者索、弱者而仆、則以為勝負、此唐時清明節拔河之戯也。当時君臣亦以此為楽。」

仏教のように戒律を重んずる立場からは拔河は賭博を誘発する遊戯として肯定されなかったことは史料 11 などでわかる（賭博については後述）。

●分布地域

『墨子』（史料１）に楚越の戦い、『隋書』（史料３）や『封氏聞見記』（史料７）には楚呉の戦いときの水上戦の武具として出てくるので、揚子江や漢水流域で使われていた。

『封氏聞見記』 に「襄漢風俗」、『隋書』に「二郡又有牽鈎之戦」という二郡は南郡江陵、襄陽（いまの湖北省）のことである。いずれも揚子江中流域、漢水の流れる荊楚の地域である。

その後、『隋書』に「俗云以此厭勝，用致豊穣。其事亦伝于他郡。」とあるように、拔河は他地域にも伝播していった。発祥地の揚子江中流域（楚）から上流（蜀）にも下流（呉越）にも伝播したとおもわれるが、北上南下もしたに違いない。

北上した結果、隋代には、蒲州（山西省運城市永済市あたり）の古寺の壁画に拔河が描かれていたように（史料４）、黄河流域にまで拔河が伝播していた。

唐代になると「大唐両京」（『梵網戒本疏日珠鈔』史料 11）で盛んになる。とりわけ中宗、玄宗の時代に宮中内外で娯楽遊戯として楽しまれた。宮廷では玄武門の楼に登って、そこから梨園の毬場でおこなわれた行事を皇帝皇女たちは見学した（史料５～８）。

南下の結果、『梵網戒本疏日珠鈔』に「大唐已南禮朗州人多樂作之。」とあるように湖南省でも盛んにおこなわれた。この一文は「大唐已南，禮、朗州人，多樂作之。」と読み、禮は澧のこととすると、澧州はいまの湖南省澧県、朗州はいまの湖南省常徳あたりをいうので、中宗、玄宗のころには揚子江以南の稲作地帯にも伝わっていたことがわかる。

揚子江中流域の風俗として発祥した拔河が唐代の史料から長安、洛陽のような北方黄河流域でも、南方洞庭湖付近でもおこなわれていたことがわかる。

●時期

・正月・立春

『荊楚歳時記』（史料２）

時代は下るが、清代洮州の拔河は「正月初五、六日」、「正月初五日午後有搘繩之戯」『洮州廳志』（史料 18）とある。この伝統を引き継いで、いま甘粛省臨潭県でおこなう「万人拔河」は元宵節の一大イベントとなっている（写真１）。

・上元・元宵節

『封氏聞見記』（史料７）、『唐語林』もおなじ

正月（旦とする版本もある）望日

『古今図書集成』暦象彙編　歳功典では上元部（第 107 冊、33 葉　巻 28）に抜河を入れ、『封氏聞見記』を引く。

上元（1 月 15 日）は小正月であるが、日本ではこの日に綱引きをするところは多い。

・二月

唐代、中宗は景龍３年、４年の二月に抜河をやらせている。（史料５）。

・寒食節（冬至から 105 日目）

説郛本、四部備要本の『荊楚歳時記』では寒食節のところに「打毬、鞦韆、施鈎之戯」とある。

・清明節（寒食から三日目）

新旧唐書や『資治通鑑』などでは史書では中宗の景龍３年、４年の抜河は２月となっているが、『景龍文館記』（史料６）では中宗が「(景龍）四年清明，中宗幸梨園，命侍臣為拔河之戯。」、『封氏聞見記』（史料７）でも「中宗時，曾以清明日御梨园毬场，命侍臣為拔河之戯。」と清明節におこなったことになっている。２月とは別に清明の日にも行ったのであろう。

『古今事物原始』（史料 16）にも「今小児両頭拽索而対挽之，力強者索，弱者而仆，則以為勝負，此唐時清明節拔河之戯也。」という。

唐代では上元、寒食（冬至から 105 日目）、清明（寒食から三日目）におこなったことがわかるが、『梵網戒本疏日珠鈔』（史料 11）に「大唐兩京，於時節日，塚人家多有婦女，共出坊曲路上…」とあるのをみると、唐代洛陽、長安では特定の節日に限定されず、ハレの日には抜河をおこなったようだ。

●材料

『荊楚歳時記』（史料２）に「以綆作篾纜」とあり、篾纜（竹ひご）で綱を作った。
唐代になると『封氏聞見記』に「古用篾纜，今民則以大麻絙」、『景龍文館記』（史料６）に「以大麻絙」とあるように麻縄になった。清朝になっても『洮州廳志』に「以大麻縄挽。作二段，長数十丈。另将小縄連挂大縄之末。」とあり、親綱、子綱ともに麻で編んでいたことがわかる。

麻縄以前に竹を使っていたのが古い形であるようだ。それは南方の自然環境のなかでは入手しやすい材料であり、縄のように綯う作業もなく、製作に手間がかからないからだろう。また今日の綱引きでも麻や稲わらの縄で作ると、行事の途中で縄が引き合う力に負けて切れてしまうことがよくある。竹製であれば、切断されることはないので都合がよい。

日本でも竹を使った綱引きがある。たとえば京都府相楽郡精華町祝園神社で 1 月 13 日におこなわれる「居籠（いごもり）祭」や新潟県糸魚川市青海町で小正月におこなわれる「竹のからかい」などである。

写真５　京都府精華町　祝園神社「いごもり祭」　2012 年 1 月 14 日

写真６　新潟県糸魚川市「竹のからかい」　2014 年 1 月 15 日

ベトナムのハノイ郊外にも二本の竹をつないで引く事例がある。

写真７　ベトナムの竹綱引き

『資治通鑑』巻 209「上幸玄武門，与近臣観宮女抜河」の胡三省の注に「以麻絙巨竹」とあった（史料６）。胡三省は南宋末期の人，同じく南宋の王象士『輿地紀勝』、祝穆の『方輿勝覧』（史料 14）に、帰州（湖北省）では「以麻絙巨竹」とある。明代でも楊升庵が「帰州之俗, 以麻繫巨竹」（史料 15）というように宋代以降、麻と竹の両方を使うこともあったようだ。これは綱の芯の部分を竹にして、それを麻で巻いて作ることをいうのかもしれない。

日本でも綱を丈夫にするため、複数の材料を組み合わせることがある。たとえば千葉県柏市大室の 8 月盆綱では、荒縄をより合わせて元綱をまず作り、それに青ガヤと若竹を織りこむ形でつくられる（柏市大室をふくむ北関東の盆綱については櫻井　2012a 参照）。

写真８　千葉県柏市大室の盆綱　　2011 年 8 月 15 日

切れない材料は竹以外にはツル類があげられる。日本では事例が多い。たとえば鳥取県三朝温泉の五月節句の綱引き「ジンショ（陣所）」では、藤蔓を材料として綯いあげた雌雄 2 本の大綱を結合させて引き合う。しかし以前は、現在のように雌雄の綱をあわせて 4 トンにもなるような巨大なものではなかった。もとは菖蒲、よもぎ、茅を集めて作ったが、やはり切れやすいので、明治以後藤蔓を材料とするようになったものである。

写真９　鳥取県三朝温泉「ジンショ（陣所）」　2013 年 5 月 4 日

福岡市西区西浦でお盆におこなわれる「カズラひき」のように、葛を使う事例は北九州の盆綱に多い（櫻井　2012b）。

写真 10　福岡市西浦　カズラひき　　2012 年 8 月 16 日

このような蔓類は中国の文献にはでてこないが、韓国では見られる。洪錫謨『東国歳時記』（19 世紀）に、「岭南俗有葛戦，以葛為索，大可四、五十長。分隊相引以決勝，謂之占

豊。」とある、ちなみにこの葛戦は上元の行事であり、「占豊」とあるように歳の初めの年占である。

●綱の形状

唐代以前の形状はわからないが、唐代は大きなものであった。

『景龍文館記』（史料６）に「以大麻絙，両頭繫十余小索，毎索数人執之以挽。」
『封氏聞見記』（史料７）に「今民則以大麻絙，長四五十丈，兩頭分繫小索數百條挂于前。」
薛勝「拔河賦」（史料９）に「成巨索兮高輪困，大合拱兮長千尺。」

唐代のころの四、五十丈（『封氏聞見記』）とは約 150 メートルになる。千尺（「拔河賦」）なら 300 メートル余。長大な「巨索」であるが、小索が数百本もつくのでそれくらいになる。現在、日本や韓国で見られる大綱もそれくらいの長さのものがあるので誇張とはいえない。ただし直径はどこにも記録がないのでわからない。

綱の持ち方は、抱えるようにして持って引くのではなく、本体の大綱に小綱（「小索」）を数百本つけ、それを持って引いたのであろう。今日でも日本、韓国でこういう親綱・子綱の形は多い。

佐賀県唐津市は鎮西、呼子を中心に綱引きが盛んであり、豊臣秀吉が朝鮮出兵に際し、兵士を鼓舞したのにはじまるという軍事と関わる起源説が多いところである。鎮西町石室で 11 月第 2 土曜におこなわれる猪子祭綱引きは写真 11 のような小綱がついている。

写真 11　佐賀県唐津市石室猪子祭綱引き　　2013 年 11 月 9 日

韓国では忠清南道唐津郡松岳面機池市里の綱引きをあげておく。

ここの綱は雌雄二本を結合させるものだが、重さ約 40 トン、太さ約 1 メートル、長さ約 200 メートルにもなる巨大な綱である。

写真 12　韓国　唐津郡機池市里　ジュルタリギ　2009 年 4 月 12 日

右下の元綱に枝綱が左右に 4 本ずつつき、枝綱にはさらに小綱がついている。

●競技のやり方

軍事的な用途としての抜河は、『墨子』に水上「舟戦之器」であり、「退者鉤之，進者強之」とあるだけで、実際にどのようなやり方で攻撃防御したのかはよくわからない。孫詒讓は『墨子間詁』で「退者以物鉤之,則不得退,進者以物拒之,則不得進。」と解釈する。おそらく鉤のようなものが先端についた長い棒状の武具があり、退散する敵軍の船に対しては、それで引っかけて逃げられないようにし、攻めてくる敵軍の船に対しては、鉤を船体に押しつけて進めないようにするものだったのだろうか。今日、ワラなどで縄を作って引っ張り合う綱引きとは違うイメージである。

綱を使うのではなく、鉤状のもので引っ掛けあう「綱引き」があったとすれば、それはわが国の鹿児島県鹿屋市や志布志市で伝承されている「カギヒキ」行事のようなものだったかもしれない（櫻井　2016）。

写真 13　鹿児島県志布志市山宮神社　カギヒキ　2012 年 2 月 12 日

写真 14　鹿児島県鹿屋市高隈中津神社　雌カギ　2012 年 2 月 19 日

カギヒキについては、松本盛長が中山太郎の説を引いている（松本 1934：61。中山太郎『日本民俗学』神事編に中山が『三国名勝図絵』巻 35 にある大隅国囎唹郡財部村の日光神社（いま曽於市財部町北俣にある）の陰暦 2 月 13 日の例祭をあげる）。そして『隋書』に「鈎初発動，皆有鼓節，群譟歌謡」というのは、「両索を繋ぐかぎがねが合せかけられた時を言ふものであろう。」と推測している。たしかに二つの鈎がかけられた瞬間から勝負がはじまり、その時の太鼓の音と観衆の歌声の喧噪さを表現しているのかもしれない。

本稿で詳細は論じないが、日本の綱引きがワラ縄などで行われるようになる前に、このような鈎付きの木を使った行事があり、起源的にはそれが古いものであったということが考えられる。これについては、「日本的山神」（櫻井　2016）でカギヒキを山の神信仰との関連で論じたことがある。単に綱引きだけではなく、日本文化の古層にある山神・田神信仰ともかかわるこれは重要な問題なので、機会を得てまた別途論じることにしたいと思う。

日光神社では今日、カギヒキは廃れて伝承されていない。鹿児島県神社庁のホームページによると日光神社は「明治以前は日光神宮と称し、島津藩主代々の崇敬も厚く、明治までは御神幸祭や鈎木引の行事が盛大に行われたが、今は中絶している。北俣、南俣の地名は、村々が南北二手に別れて実施された鈎木引の行事に由来するという。」（注１）

廃れてしまったが、いま鹿屋、志布志に残っている同類の行事からその形態や内容を推しはかることができるであろう。

なお『隋書』に「鈎初発動，皆有鼓節，群譟歌謡」という「歌謡」がどのようなものであるかは不明であるが、日本では綱引き歌がある。たとえば沖縄では本番前、「ガーエー」という相手を威嚇する行為をするが、そのとき相手の悪口をいい、自分の陣営に気合いを入れる歌をうたう。兵庫県美方郡新温泉町久谷の端午節の綱引きでは祝い歌である「石場つき歌」があり、それにあわせて綱で地面をたたき掛け声をかけながら引き合う。

『荊楚歳時記』に「相胃綿亘数里」とある。一里が 700 メートルほどとすれば、数里はかなり長い。そんなに長い距離を引き合ったのか、疑問がのこる。

唐代の競技の様子については、薛勝「抜河賦」（史料９）に勇士たちの具体的で活き活きとした描写がある。汗が流れ落ち、血脈が浮かび上がり（汗流珠而可掬。陰血作而顔若渥丹，脹脉憤而体如瘻木）、倒れても引きずられまいと力をこめる姿態（仆而将断， 猶匍匐而不迴）は、実際に見たものでないと写し出せない臨場感にあふれている。

「抜河賦」（史料９）に「於是勇士畢登，囂声振騰。大魁離立，麾之以肱。」というのは、綱に上り雄叫びをあげるもの、綱の傍らで指揮を執るものがいたことを予測させる。こういう光景は韓国でも日本でも見られる。

写真 15　沖縄県糸満市　大綱引き　　2012 年 9 月 30 日

写真 15 は沖縄糸満の大綱引きで、南北に分かれた指揮官が綱の上に登り、肘をつきあわせて気勢を上げる場面である。まさに「抜河賦」が「 之れを麾（さしまね）くに肱（ひじ）を以ってす。」を彷彿とさせる。

抜河のやり方は、複数の史料から推測して、大綱にたくさんの小綱をつけ、左右（東西）の二方向に分かれて大勢の人が引いて勝負を争うという今日の形式と変わりはないようだが、綱は一本綱なのか二本綱なのか、という疑問がのこる。

『梵網戒本疏日珠鈔』（史料 11）に「相對以一條大繩，繩上復有子繩。繩頭著一木板方三寸長二尺五寸。兩頭繫繩。各樓［摟が正しいか］人胸前，向前牽挽〔挽が正しいか〕使過河。」とある。この文を双方が一本ずつ綱を用意し、子綱をつける。縄の先に方三寸長二尺五寸（三寸＝約９㎝、二尺五寸＝約 75 ㎝）の板をつける。双方の綱を先で結ぶ、と解釈できる。「兩頭繫繩」から二本綱と想定できる。

この木板の役割がよくわからない。木板をつけるのが大綱（親綱）なのか、小綱（子綱）

なのかも不明。子綱なら引っ張るとき綱を直接握るのではなく、綱につないだ木板を両手で掴んで引くのかもしれないが、今日、韓国でも日本でもそのような綱ややり方は存在しない。

二本の綱を結んだところが中心点になるので、木板はそれを示す標識とも考えられる。

沖縄あるいは韓国などの大綱引きでは、巨大な雄綱、雌綱を結びつけるとき接合部の穴に貫ぬき棒（カヌチボウ）を挿し込む。ここにいう木板がそういう役割のものだった可能性もあるが、直径９センチほどではすぐに折れてしまうだろう。

写真 16　韓国　唐津郡機池市里　雌雄の綱を繋ぐ貫ぬき棒　2009 年 4 月 12 日

写真 17　那覇大綱挽き　カヌチボウ　　2015 年 10 月 11 日

ここで注目したいのは「各樓［摟］人胸前，向前牽桅〔挽〕使過河」である。すでに張固也（2014：102）が指摘していることであるが、双方が顔合わせに向き合って後ろ（背中方向）に手で引っ張る今日普通の綱引きのやり方ではなく、双方が背中で向き合い、両手を地

面について匍匐前進するやり方であったと思われる。その場合、綱を背中から肩を通して胸の前で掴み、上半身全体を使って引っ張るやり方となる。『封氏聞見記』に「兩頭分繫小索數百條，挂于前」といい、薛勝「抜河賦」に「派別脉分，以挂人胸腋。各引而向」といい、梅堯臣「和江隣幾学士画鬼抜河篇」（史料４）に「西廂四鬼来背挽、双手碓下抵以肩」というのはその描写ではなかろうか。

そうだとすると、木板は胸の前で支えるものとなるが、約 75 センチの長さの棒は少し長めだが、決して不自然というわけではないだろう。

このように推測するのは、現在、背中を向き合って行う綱引きが存在するからである。たとえば、チベット族には「大象抜河」があり、写真のように背中あわせで這いつくばる形でおこなう。いまは中国各地でスポーツ競技として普及している（櫻井　2014 参照）。

写真 18　大象抜河　西藏波密県でのスポーツ大会　　2009 年 10 月 14 日

１対１で競技することもあれば、複数で争うことも可能である。

写真 19　大象抜河

韓国では慶尚南道密陽市甘川の蟹綱引き（ギジュルダンギギ）がこの形式である。百中と

いう旧暦 7 月 15 日のお盆におこなわれるノリのなかの行事である（韓寧爛・櫻井龍彦 2016）。

写真 20　韓国慶尚南道密陽市甘川の蟹綱引き　　2015 年 8 月 29 日

綱の引き方、遊び方も一様ではなく、ところ変われば特色があったようである。抜河の形式が地方によって違っていたことは、『梵網戒本疏日珠鈔』（史料 11）で「蓋州亦有處。竪一大木，頭繫兩繩，二邊各有百人，爭牽取倒。」と別の所（具体的地名は書かれていない）では、地面に大木を立てて、それに二本の綱を繋ぎ引っ張って地面から自分の陣地側に引き倒した方が勝ちという形式があったことを言う。

二本綱ではないが、柱状の木に一本の綱を巻きつけて左右に引き合う行事はベトナムにある。図５は伝統的版画であるドンホー画に描かれたケオコー（綱引き）の様子である。中央の木に綱をとおしてあり、この木の移動によって勝敗をつける。以前、農村の男たちはふんどしで仕事をしていたので、こういう格好で引き合う。引っ張る人数にきまりはないが、左右同数でなければならない。この絵は旧正月の春節か旧暦の中秋節（旧暦 8 月 15 日）前後の収穫祭のときの綱引きだと思われる。

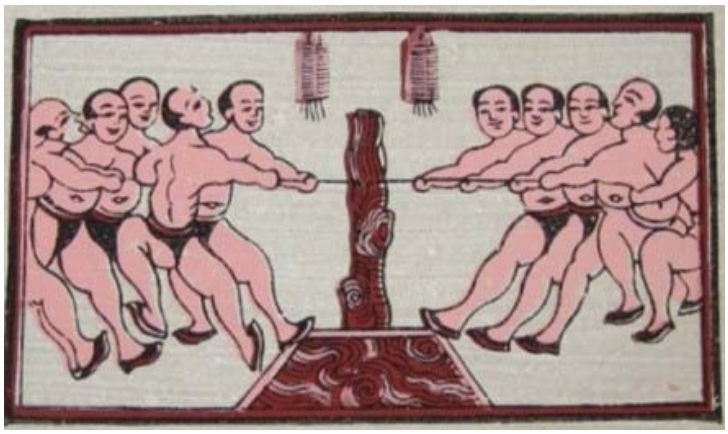

図５　ベトナム　ドンホー画の綱引き（**Kéo co**：ケオコー）

神話学的に解釈すれば、地面に垂直に立てた木は宇宙樹の象徴である。綱引きは、乳海攪拌による天地創造を再現する聖なる行為であるかもしれない。

図６　乳海攪拌図　　パンジャブ高原　19 世紀

立てた木に綱をつけるわけではないが、よく似た事例に中国広西チワン族自治区三江、融水地域の苗族に「拉鼓」という抜河に類する行事がある。木鼓という楽器に綱を巻きつけてそれを引き合う。木鼓は楓の木に牛の皮を張った太鼓で、祖霊が宿る神聖な器である。（広西壮族自治区地方志編纂委員会　1992：136）

写真 21　苗族の「拉鼓」

現在では写真 22 のように観光化した形になっているが、勝利した側の豊年豊作、家畜繁栄を予祝することは変わらない。木鼓に農耕牛の頭を描いているのは、そういう意味もこめているようだ。

写真 22　広西融水苗族自治県桿洞郷桿洞村　蘆笙拉鼓節　2015 年
http://www.seo122.com/4798.html

『梵網戒本疏日珠鈔』でいう縄が二本を前提としているとすれば、中国にも二本綱があったことになり、貴重な史料である。

清代洮州の抜河は「用長縄一条，繫小縄数」で、やはり綱に小綱を結んだが、別のところに「其俗在西門外河灘,以大麻縄挽。作二段，長数十丈。另将小縄連挂大縄之末。」とあり、数十丈（10 丈は約 30 メートル）もする長い綱を「二段に作る」という。二段の意味が二本綱をいうとすれば、これも貴重な史料となる。ただし洮州の抜河を継承し甘粛省臨潭県で復活した現在の「万人抜河」は一本綱である（写真１）。

綱引きのやり方について、『梵網戒本疏日珠鈔』には興味深い記事がある。
「各三五百人，黒黒相抱腰。中央盡地作河，兩邊人數平等，遞相抱腰。最在前人手抱一物。競牽一時用力，向後桍〔挽〕得過河者。」

綱を使うのではなく、行列を作り前の人の腰を抱えてやる方法である。いわば人が綱になる形で、左右に分かれた列の先頭は直接組み合うのではなく、なにか一つの物を持ち合うようだ。

腰抱き型の綱引きはなにも道具がいらないので、世界の綱引き中で最も原初的なものかもしれない。エジプトナイル川中流にあるベニ・ハッサンは古墳墓群で知られる。このなかの前 2050 年とされるケティ王子の墓壁に、２人の少年が前の人の腰を抱きかかえて後方に引っ張る絵が画かれている（大林太良ほか　1998：134)。

いまでもアフリカではこうした形式の「綱引き」は存続しているようで、写真 22 はケニ

アの子どもたちが興じているいわば人間綱引きである。先頭の子は互いの手をつなぎ、うしろの子どもたちは前の子の腰をつかんでいる。

写真 23　ケニア　小学校の体育の授業

人間が綱になる腰抱き式の綱引きはベトナムにも見られる。

写真 24　ベトナム南中部高原 Pleiku、Kon Tum（Gia Lai 省）に住む Gia Rai（Ja Rai とも：ジャライ）族

勝敗の判定には、「立大旗為界」（『封氏聞見記』）、「載立長旌，居中作程」（「抜河賦」）とあるように、旗を綱の中心点に立て、そこを境界にして移動の範囲で勝敗を決めた。『封氏聞見記』には、「東朋貴人多，西朋奏勝不平。請重定，不為改。西朋竟輸。」とあり東組は貴人が多く参加したので勝利したが、西組は不公平があったと抗議し再審判をもとめた

が、結果は覆らず西組の負けとなったという逸話まで書かれている。

なお『洮州廳志』には「為西城門為界」とあり、清代洮州の抜河は西の城門を境とした。

綱の中心点が石碑として残されている例を日本であげておくと、さきにみた猪子綱引きをおこなう唐津市鎮西町石室である。旧小学校に至る道の入口が中心点であった。

写真 25　鎮西町石室猪子綱引き中心点　　2013 年 11 月 9 日

●引き手

『新唐書』中宗本紀　景龍３年「(中宗）及皇后幸玄武門，観宮女抜河」

『資治通鑑』景龍３年「上（中宗）幸玄武門，与近臣観宮女抜河」

『新唐書』中宗本紀　景龍４年「(中宗）及后、妃、公主観三品以上抜河」

『舊唐書』中宗本紀　景龍４年「（中宗）令中書門下供奉官五品已上、文武三品已上并諸学士等, 自芳林門入集於梨園毬場, 分朋抜河」

『資治通鑑』景龍４年「（中宗）命文武三品以上抛毬及分朋抜河」

『景龍文館記』中宗　景龍４年「（中宗）時七宰相、二駙馬為東朋，三相五將為西朋。僕射韋巨源、少师唐休璟以年老，隨絙而踣，久不能起。帝以為笑楽。」

『封氏聞見記』中宗　景龍４年「（中宗）命侍臣為抜河之戯。時宰相、二駙馬為東朋，三宰相、五将軍為西朋。」

玄宗「観抜河俗戯」詩序「故命北軍, 以求歳稔」。詩に「欲練英雄志」

『新唐書』兵志、『唐会要』軍雑録　玄宗　天宝末「六軍宿衛, 皆市人（白徒）, …壮者為角觝、抜河」

宮中社会での遊戯としての抜河では三品以上の位階の者、宰相、駙馬、将軍、僕射などの官職名が出てくる。玄宗「観抜河俗戯」詩には北軍の兵士が、『新唐書』兵志、『唐会要』軍雑録には六軍宿衛が引いたという。ただし後者は軍人といえども、当時は太平の世で実質はみな市人白徒すなわち民間の素人集団であった。

中宗の時代には、宮女すなわち女性も参加していたことがわかる。『梵網戒本疏日珠鈔』に「墉人家多有婦女，共出坊曲路上，各三五百人」とあるので、城内の婦女が街巷に出て行った。

引き手の数も多かった。

『景龍文館記』（史料６）

「以大麻絙，両頭繫十余小索，毎索数人執之以挽，争絙，以力弱者為輸。」、「（中宗）時七宰相、二駙馬為東朋，三相五將為西朋。」

『封氏聞見記』（史料７）

「今民則以大麻絙，長四五十丈，兩頭分繫小索數百條挂于前。分二朋，兩相齊挽。當大絙之中，立大旗為界。震鼓叫噪，使相牽引，以郤者為勝，就者為輸。」

「中宗時，曾以清明日，御梨園毬場，召侍臣為拔河之戲。時宰相二駙馬為東朋，三宰相五將軍為西朋。」

「玄宗數御樓，設此戲，挽者至千餘人。」

薛勝「抜河賦」（史料９）

「令壮士千人，分為二隊。…成巨索兮高輪困，大合拱兮長千尺。爾其東西之首也，派別脉分，以挂人胸腋。各引而向，以牽乎強敵。載立長旌，居中作程。苟過差於所誌，知勝負之攸平。」

『梵網戒本疏日珠鈔』（史料 11）

「盡地作河，兩邊各有百人，或二百三百五百。相對以一條大繩，繩上復有子繩。繩頭著一木板，方三寸，長二尺五寸。兩頭繫繩。各樓［摟］人胸前，向前牽桍〔挽〕使過河。」「竪一大木，頭繫兩繩，二邊各有百人，爭牽取倒。」

『洮州廳志』（史料 18）

清代洮州の抜河も「用長繩一条，繫小繩数十，千百人挽两頭，分朋牽扯之。」

数百人から千人という人数が参加している。

●大規模で壮観な行事であった

抜河をおこなった場所は、唐代の宮廷では玄武門を出て、梨園の打毬場であった。ポロ競技ができたところなので、かなり広い場所であっただろう。それを楼上から皇帝が見学したことが『封氏聞見記』（史料８）「玄宗數御樓，設此戲」などからわかる。

『洮州廳志』（史料 18）では「其俗在西門外河灘」とあり、清代洮州の拔河は城門の外にある河岸でおこなった。拔河の記事で実際に河が出てくるのはこの例だけである。

太鼓を鳴らし、歌も飛び交い、にぎやかな競技の様子が史料からうかがえる。
『荊楚歳時記』（史料２）「相罥綿亘数里，鳴鼓牽之」
『隋書』（史料３）「鈎初発動，皆有鼓節，群譟歌謡，振驚遠近」
『封氏聞見記』（史料７）「震鼓叫噪」、「挽者至千餘人，喧呼動地。蕃客士庶觀者，莫不震駭。」

薛勝「拔河賦」（史料９）からは該当箇所を引用しないが、全編に具体的で詳細な描写があり、塵埃が舞い、勇者が力を尽くして戦う光景、飛散する土埃が眼前にひろがり、天を揺るがす応援者の太鼓やかけ声と市場の喧噪が耳に鳴り響く。

『封氏聞見記』（史料７）に玄宗のとき、「挽者至千余人」と千人をこえる見学者がいて、「喧呼動地。蕃客士庶觀者，莫不震駭」というので、蕃客すなわち外国からの訪問者もいてその規模に驚いた様子がわかる。
薛勝「拔河賦」（史料９）にも「皇帝大誇夸胡人…名拔河於内，実耀武於外…信大国之壮観哉。…於是匈奴失筋，再拜称觴曰，君雄若此，臣国其亡。」とあるように、遊びといえども、それを大規模に組織できること自体が、皇帝権力を国内外に誇示する手段ともなったようである。また「匈奴失筋」（匈奴も力尽きて筋力を失った）とあるので、異民族も参加したのであろう。

数百人から千人規模であったことは、次の史料からもわかる。
『封氏聞見記』（史料７）「挽者至千余人。」
薛勝「拔河賦」（史料９）「令壮士千人」
『梵網戒本疏日珠鈔』（史料 11）「兩邊各有百人，或二百三百五百」、「二邊各有百人」、「各三五百人」
『洮州廳志』（史料 18）「千百人挽两頭」

●大規模な行事になると大勢の参加者、見学者が集まるので、綱引きには市が立った
『旧唐書』（史料５）中宗本紀　「上又遣宮女為市肆，鬻売衆物，令宰臣及公卿為商賈，与之交易」
『新唐書』（史料５）中宗本紀　「為宮市以嬉」
『新唐書』（史料 12）兵志、『唐会要』（史料 12）「富者販繒綵」

もっともこれは『旧唐書』に「宰臣及び公卿に令じて商賈を為さしむ」とあるように、市

井の商賈を宮人が模擬的な遊びとして楽しむ性格があったようだ。

●抜河は勝負事なので、大勢の人びとの間では、賭博も開帳された
『梵網戒本疏日珠鈔』（史料 11）「以賭當財物」、「賭三千五千錢」、「得一覩物」（覩は賭のことか）とある。『梵網戒』は十重四十八軽戒といって、犯すべからざる重い十戒と比較的軽い四十八の戒を説くもので、牽道のような闘技は第三十三軽戒に入っている。
　史料 11 の引用文につづいて『梵網戒本疏日珠鈔』には、牽道以外にも擲石（飛石）、投壺、棊子（囲碁）などをあげて戒めている。

　與咸云，擲石、投壺，此應合爲一種、投壺乃禮記古法，籌長赤二十二隻，象十二月，三歩之外投籌。或通以石作籌。首鋒者故云擲石、投壺也。若如他鈔云，擲石謂之飛石，十二斤爲機發，行三百歩者。此乃兵中戰具砲石也。非以此爲戲法。故不用此解。已上。
　疏主，明曠，擲石、投壺以爲別物。故有二種。法進亦爾。別別注故。與咸此二合爲一物。牽道二字有本無之。疏主所釋無此二字。明曠所釋以爲一種。與咸與下八道合爲一物。故彼文云，八道行城。有本無牽道二字。故知此即一種戲也。涅槃經云，八道行城，一切戲笑。悉不應觀。榮鈔云。八盡爲道。以棊子行之。似行城法。熙鈔云。若依瑞應經云。二月八日。是四天王捧太子馬足。

　重罪というほどではないが、金銭財物を賭する博戯は身を滅ぼし、秩序を乱すものとして禁止された。『大般涅槃経』を引いて、「八道行城，一切戲笑。悉不應觀。」という。八道行城は八道行成のことで、日本では「やすかり」と呼んでいる遊戯である（『倭名類聚鈔』）。抜河も戯笑として好まざるものと仏教では認識されたことがわかる。

原典

『古今図書集成』博物彙編芸術典技戯部　中華書局本　1934 年
『墨子』　四部叢刊初編本
『墨子間詁』　中華書局本　2001 年
『荊楚歳時記』　宝顔堂秘笈本
『隋書』　中華書局本　1973 年
『旧唐書』　中華書局本　1975 年
『新唐書』　中華書局本　1975 年
『景龍文館記』　説郛（宛委山堂本）本
『封氏聞見記』　欽定四庫全書本
『全唐詩』　中華書局本　1960 年
『資治通鑑』　中華書局本　1956 年

『文苑英華』　中華書局本　1966 年
『唐会要』　国学基本叢書本　1968 年
『唐語林』　四庫全本珍書本
『宛陵先生集』　四部叢刊本
『蘇魏公文集』　欽定四庫全書本
『輿地紀勝』　文海出版社
『方輿勝覧』　文海出版社　1981 年
『梵網戒本疏日珠鈔』(『大正新脩大蔵経』)　1932 年
『楊升庵叢書』　天地出版社　2002 年
『古今事物原始』　續修四庫全書本
『五雑組』　中華書局本　　1959 年
『洮州廳志』（光緒 33 年抄本）　成文出版社

引用・参考文献

石田幹之助　1973「唐史漫抄」『増訂長安の春』、平凡社：東洋文庫
大林太良ほか　1998『民族遊戯大事典、』大修館書店
W・エバーハルト　1987『古代中国の地方文化、』、六興出版
郭宝鈞　1959『山彪鎮与瑠璃閣、』、科学出版社
韓寧爛・櫻井龍彦　2016「韓国密陽百中ノリと甘川蟹綱引きに関する調査報告書」
GSID Discussion Paper No.201　名古屋大学大学院国際開発研究科
広西壮族自治区地方志編纂委員会　1992『広西通志　民俗志』、広西人民出版社
洪錫謨　『東国歳時記』(『朝鮮歳時記』平凡社：東洋文庫　1971 年所収)
櫻井龍彦　2012a「盆綱攷」『国際開発研究フォーラム』42
櫻井龍彦　2012b「綱索上的“鬼”：日本“盂蘭盆節”中被形象化的中国目連故事」
『節日研究』第 6 輯（鬼節専輯)、泰山出版社
櫻井龍彦　2014「北海道アイヌの綱引きに関する考察-あわせて韓国の「게줄다리기：
ケジュルタリギ（蟹綱引き)」、中国の「大象抜河（象綱引き)」を論ず」
『学術発表論文集 2014 雪の民俗と文化国際学術大会-アジアの雪民俗と文化』(韓国語)
櫻井龍彦　2016「日本的山神」『中国山地民族研究集刊』2015 年巻第 2 期（総第 4 期)
社会科学文献出版社
四川省博物館　1976「成都百花潭中学十号墓発掘記」『文物』第３期
首都博物館編著　2009『多彩中華』、北京出版社
ジル・パース　1978『螺旋の神秘 ： 人類の夢と怖れ』平凡社（イメージの博物誌７）
鈴木圓蔵　1978「唐代の抜河についての一試考」『神奈川県立外語短期大学紀要』
人文・社会篇７
盛琦、丁志明　1992『中国体育風俗』、天津人民出版社

張固也　2010「唐代抜河新考」『民俗研究』4 期
中村裕一　2009『中国古代の年中行事』第 1 冊春、汲古書院
松本盛長　1934「支那の抜河に就いて」『南方土俗』3-1、南方土俗発行所
羅香林　1955「唐代抜河之戯考」『唐代文化史』、台湾商務印書館

写真出所（出所のないものは著者自ら撮影したもの）

１，甘粛省臨潭県　「万人抜河」
http://www.gs.xinhuanet.com/2015-06/03/c_1115501740.htm
２，ダフール族の頸力比賽
首都博物館編著　2009『多彩中華』北京出版社　p 35
３，福井県美浜町「水中綱引き」　2009 年 1 月 18 日
４，佐賀県唐津市鎮西町「海中盆綱引き」　2009 年
http://www1.saga-s.co.jp/news/saga.0.1383952.article.html
５，京都府精華町　祝園神社「いごもり祭」　2012 年 1 月 14 日
６，新潟県糸魚川市「竹のからかい」　2014 年 1 月 15 日
７，ベトナムの竹綱引き
http://vovworld.vn/ja-JP/%E3%83%8F%E3%83%8E%E3%82%A4%E4%BE%BF%E3%82%8A/%E3%83%99%E3%83%88%E3%83%8A%E3%83%A0%E3%81%AE%E7%B6%B1%E5%BC%95%E3%81%8D/397469.vov
８，千葉県柏市大室の盆綱　2011 年 8 月 15 日
９，鳥取県三朝温泉「ジンショ（陣所）」　2013 年 5 月 4 日
10，福岡市西浦　カズラひき　2012 年 8 月 16 日
11，佐賀県唐津市石室猪子祭綱引き　2013 年 11 月 9 日
12，韓国　唐津郡機池市里　ジュルタリギ　2009 年 4 月 12 日
13，鹿児島県志布志市山宮神社　カギヒキ　2012 年 2 月 12 日
14，鹿児島県鹿屋市高隈中津神社　雌カギ　2012 年 2 月 19 日
15，沖縄県糸満市　大綱引き　2012 年 9 月 30 日
16，韓国　唐津郡機池市里　雌雄の綱を繋ぐ貫ぬき棒　2009 年 4 月 12 日
17，那覇大綱挽き　カヌチボウ　2015 年 10 月 11 日
18，大象抜河　西蔵波密県でのスポーツ大会　2009 年 10 月 14 日
http://sports.sina.com.cn/o/p/2009-10-14/20574633140.shtml
19，大象抜河
http://www.0737weal.com/d/mmwfuhh/
20，韓国慶尚南道密陽市甘川の蟹綱引き　2015 年 8 月 29 日
21，苗族の「拉鼓」

大林太良ほか　1998『民族遊戯大事典』大修館書店　p 98
22, 広西融水苗族自治県桿洞郷桿洞村　蘆笙拉鼓節　　2015 年
http://www.seo122.com/4798.html
23, ケニア　小学校の体育の授業
http://wwj.world/2015/11/kenya_taiiku/
24, ベトナム南中部高原 Pleiku、Kon Tum（Gia Lai 省）に住む Gia Rai（Ja Rai とも：ジャライ）族
25, 鎮西町石室猪子綱引き中心点　　2013 年 11 月 9 日

図版出所

１，上杉本『洛中洛外図』　　子どもの綱引き
http://izucul.cocolog-nifty.com/balance/2013/10/post-55a3.html
２，名古屋城本丸御殿対面所襖絵の風俗図　　子どもの綱引き
https://plaza.rakuten.co.jp/hitoshisan/diary/201612250000/
３，水陸攻戦紋様展開図
四川省博物館　1976「成都百花潭中学十号墓発掘記」『文物』第３期　図版貳
４，喜多川歌麿　寛政二美人の首引き
http://ch.kanagawa-museum.jp/dm/ukiyoe/esi/kitagawa/d_kitagawa02.html
５，ベトナム　ドンホー画の綱引き（**Kéo co**：ケオコー）
http://vovworld.vn/ja-JP/%E3%83%8F%E3%83%8E%E3%82%A4%E4%BE%BF%E3%82%8A/%E3%83%99%E3%83%88%E3%83%8A%E3%83%A0%E3%81%AE%E7%B6%B1%E5%BC%95%E3%81%8D/397469.vov
６，乳海攪拌図　パンジャブ高原　19 世紀
ジル・パース　1978『螺旋の神秘 ： 人類の夢と怖れ』平凡社（イメージの博物誌７）

注

１，http://www.kagojinjacho.or.jp/search/ohsumi/soo/post-739.html

付記

本稿は科研費助成事業「地域開発からみた日本の伝統的運動文化の現代的意義と新たな価値創造の探究」山田理恵代表　課題番号 26350724 の研究成果の一部である。